海燕社の小さな映画会2025

会場：沖縄県立博物館・美術館 講堂（3F）

料金：1,200円（要予約）　当日料金1,500円

予約はそれぞれの回の１か月前から受け付けます。※小中高生は６００円（先着10名まで無料）

TEL：098-850-8485 ／ E-mail：mail@kaiensha.jp

九州・沖縄から文化力
後援：沖縄県、那覇市
芸術文化振興基金

4.27（日）14時～

『ぜんまい小屋のくらし』
制作：民族文化映像研究所 /1984 年 /25 分

新潟県の北部、朝日連峰の懐深くに位置する奥三面（おくみおもて）。奥三面を描いた自主製作映画『越後奥三面 山に生かされた日々』の撮影の過程で生まれた短編作品のひとつ。奥三面の生活技術を後世に伝えるために本編よりさらに詳細に描く。

『西米良の焼畑』
制作：民族文化映像研究所 /1985 年 /43 分

熊本県と宮崎県の県境にある西米良村。特徴ある山里の生産背景を背負って生きてきた村である。わが国で焼畑耕作がなくなって久しい。このフイルムは焼畑技術を中心にしてその生産背景に人びとが何を願い、何をもって生き続けられたかを探るものである。

6.15（日）14時～

『ふじ学徒隊』
監督：野村岳也 / 製作：海燕社 /2012 年 /48 分

沖縄戦で動員されたほとんどの女子学徒隊が多くの戦死者を出した。そんな中、3 名の戦死者にとどまったのが「ふじ学徒隊」である。1941 年へチマ襟の制服を着た積徳高等女学校の 1 年生。しかし、彼女たちは一度も憧れのセーラー服を着ることはなかった。

『語り継ぐ受け継ぐ豊見城の戦争記憶』
著作：豊見城市教育委員会 / 映像制作：海燕社
2019 年 /4 2 分

年々、戦争体験者が少なくなり、沖縄戦の記憶の継承が課題となっている。豊見城市では、戦争を知らない世代に故郷の沖縄戦を伝えようと、二年間にわたり、戦争体験者の話を映像に記録した。戦前、戦中、戦後。戦争体験者の話を通して、豊見城の戦争とは、どのようなものだったのか。31名の証言で振り返る。

8.24（日）14時～

人形アニメーション映画

『死者の書』
原作：折口信夫 / 監督・脚本：川本喜八郎
桜映画社・川本プロダクション /2005 年 /70 分

※アンコール上映

日本を代表する人形アニーメーション作家・川本喜八郎は、伝統文化をふまえた独自の表現により数々の作品を世界に発表しつづけてきた。発案以来 30 年の構想を経て製作された「死者の書」は、川本の集大成であり、折口信夫の不朽の名作「死者の書」の初映像化である。

10.19（日）14時～

後援：公益財団法人 ポーラ伝統文化振興財団

『文楽に生きる 吉田玉男』
ポーラ伝統文化振興財団 /1981 年 /36 分

人形の主遣い、吉田玉男の演技と、その演技の源となっている彼の中に何十年も蓄積されてきた修行の厳しさを描く。吉田玉男の高度な芸術的価値をもつ演技だけではなく、今も昔も演技の道に精進を重ねることを忘れない真摯な姿勢を映し出している。

『伊那人形芝居』
－明日へつなぐ伝承のチカラ－
ポーラ伝統文化振興財団 /2010 年 /36 分

長野県伊那谷に約 300 年前から継承されてきた「伊那人形芝居」。かつては40近くあった人形座は、今では四座（黒田、早稲田、今田、古田）を残すのみとなったが、危機に瀕するたびに創意工夫で蘇らせ、新たな生気で苦難を乗り越えてきた。

11.30（日）14時～

『西　陣』
監督：松本俊夫
配給：イメージフォーラム /1961 年 /26 分

当時京都でユニークな活動を展開していた記録映画の鑑賞組織が、日本で初めて芸術運動として映画の自主製作をプロデュースした作品で、短い機織りのショットなどを多用し、閉塞した空間の窮屈に、安保挫折後の空洞感や不在感をダブル・イメージした作品。

『石の詩』
監督：松本俊夫
配給：イメージフォーラム /1963 年 /25 分

「ライフ」のカメラマンのアーネスト・サトウが香川の石切り場で撮ってきた数百枚の写真をもとに映画を構成している。ドキュメンタリー番組から委嘱され、ゴー・サインが出てから、オン・エアまでわずか１０日くらいしかなく、作品が完成したのはオン・エア１時間前だったという作品。

上映作品、上映日は都合により変更することがあります。詳細は、海燕社のウェブサイト（http://www.kaiensha.jp）や SNS にてご確認ください。